

市のまち 地名の由来

「No.5」



「コウヤ」の地名には、高谷のほかにも、高野、荒谷、興屋などの文字が使われ、全国的に多い地名の一つになっています。

市川市の高谷は、鎌倉時代の正治元年(一一九九)ごろには、「沖島」とか「浮島」と呼ばれ、漁師の家が七戸あったといわれています。これは、砂浜の前面にできた新しい砂丘の背後に潮が回り込み、ちょうど島のような状態になったものを、そう呼んだのでしよう。

地下鉄東西線原木中山駅を上り方面に出て東側を眺めると、安養寺の大きな屋根が見え、この寺

を中心に高谷のまち全体が盛り上がった形に見えます。この情景は、明らかに、この

まちが、砂丘の上にできた集落であることを証明しています。だとすると、「高谷」の地名は、

「高まりのある原野」即ち「高野」だったのではないでしょうか。また、「コウヤ」は、「耕野」

もとは「高野」？

とも解釈できます。荒地を耕地にした所という意味です。わずか七戸の漁師の家が、漁業のかたわら開墾にたずさわり、やがてそこに集落ができたので、今日の高谷のまちの起こりとなったのです。

江戸時代には塩田をつくり、塩業の盛んな集落になりました。現在でも、そのころの繁栄の名残として、真言宗の安養寺、浄土宗の了極寺、日蓮宗の常明寺、それに鎮守の大鷲神社や羽黒神社が、ところ狭しと密集しています。大鷲神社が高谷の鎮守として祭られた理由について、江戸時代の文化年間につくられた「葛飾誌略」には、「今より二百年以前(慶長年間に相当)上総国今津(市原市)より流れつきしを祭る。氏子のもの鳥を喰はず……昔は鎮守香取大神宮也とぞ」とあります。また、了極寺にある法然上人の御影は、門弟の阿波之介が携えて布教にあたったものを、磯貝新兵衛が譲り受けて祭ったものと伝えています。

高谷で忘れられないものは、やはり、千葉県最初の横綱「境川浪右衛門」の誕生の地であるということでしょう。

今回は、「押切」を予定しています。

(社会教育指導員・綿貫喜郎)



訂正 前回の「若宮」で、胤堂・胤戸とあるのは、胤堂・胤戸(ねずみ堂・ねずみ戸)の誤りでした。

写真は、安養寺近くのマンションから見た高谷の家並みです。

